

褒めるか叱るか曖昧な状況での親の養育態度が レジリエンスと保育観の発達に及ぼす影響

佐々木 真吾

Effects of Parental Parenting Attitudes on Resilience and the Child-caring Beliefs: Consideration in a Complicated Situation Whether to Praise or Scold

Shingo SASAKI

抄 録

子どもの行動に良い面と悪い面が存在するなど、子育ての場面では子どもを褒めるか叱るか曖昧な状況が数多く存在する。本研究では、褒めるか叱るか曖昧な状況での親の養育態度がレジリエンスと保育観の発達に及ぼす影響を検討した。大学生を対象に、子ども期の曖昧な状況での親の対応を、どの程度褒められたか、叱られたかという観点から回想してもらい、レジリエンス尺度および保育観尺度との関連を調査した。その結果、レジリエンスの合計点は、褒められることが多く叱られることが少ないと回答した者で、褒められることが少なく叱られることが多いと回答した者よりも高かった。同様に、レジリエンスの下位尺度である内面共有性、内省性の得点も、褒められることが多く叱られることが少ない者で高かった。また、子どもと対等に関わることを重視する協調的保育観は、褒められることが多く叱られることが少ない者で、褒められることが少なく叱られることが多い者よりも高かった。以上の結果から、褒めるか叱るか曖昧な状況では、子どものポジティブな側面を見いだして褒めることが、レジリエンスや保育観といった情緒・社会性の発達を促進することが示唆された。

キーワード：養育態度、褒める、叱る、レジリエンス、保育観

1. 問題と目的

Bowlbyの愛着理論を代表に、親と子どもの関わりに関する検討はこれまで様々な角度からなされてきた。その中で、親の肯定的な養育態度は、子どもの情緒や社会性の発達を促すことが明らかになっている (e.g., 兄井・須崎・横山, 2013; Galambos, Barker, & Almeida, 2003; Krevans & Gibbs, 1996)。また、親の養育態度を、子ども本人がいかに認知するかという「養育認知」の重要性も指摘されている (e. g., 浅野・吉澤・吉田・原田・玉井・吉田, 2016; 島, 2014; 吉澤・吉田・原田・浅野・玉井・吉田, 2017)。例えば、浅野ら (2016) は、中学生とその親を対象に、親の養育態度と子どもの養育認知が、子どもの社会性に及ぼす影響を検討した。その結果、親の受容的態度が子どもの養育認知を経由して、共感性を高めることが明らかとなった。このことから、親が受容的であることに加え、子どもが親の養育態度を肯定的に認知する

ことが、子どもの社会性を高める要因であることが示唆されている。また、子ども期の褒められる・叱られるという体験を、大学生がいかにか認知しているかにより、現在の自尊感情が異なることを示した研究もある(趙・松本・木村, 2011; 井上, 2015, 2018)。これらの研究では一貫して、親から褒められたと認知している大学生の方が、自尊感情が高いことを明らかにしている。

先行研究では、例えば「子どもの悩み事を真剣に聞くか」、「子どもが悪いことをしたら叱るか」、「子どもが何かうまくできたときには褒めるか」など、一般的な子どもへの養育態度を明らかにする尺度を用いている。しかしながら、子どもの行動の中には、親にネガティブな感情とポジティブな感情を同時にもたらす可能性のある行動や、社会的に許容されがたい行動と望ましい行動が共存する状況など、褒めるべきか、叱るべきか判断が難しい曖昧な状況も多々存在する。例えば、親が大事にしていた物を、子どもが「壊してしまった」と報告に来た、などの状況である。このような状況では、親は怒りを強く感じ、子どもを叱りたくなくなるかもしれない。一方で、正直に報告してくれたことに心を動かされ、叱らずに、褒めるという対応を取りたくなるかもしれない。ただし、物を勝手に使う、壊れるくらい乱暴に扱うなどの行動は、社会的に望ましくない行動である。望ましくない行動をなくすためには、人の物を勝手に使うのは良くないと叱る必要があると考えるかもしれない。その反面、子どもが自ら報告に来たという行動は、社会的に望ましい行動である。素直に過ちを報告するという行動を促進するために、褒めるべきだと考える可能性もあるだろう。

このように、子育ての場面には、褒めるか叱るか曖昧な状況が数多く存在すると考えられる。それでは、このような曖昧な状況において、親はどのように子どもに対応するのが望ましいのだろうか。また、このような場面での親の対応が、子どもの発達にいかなる影響を及ぼすのだろうか。先行研究をふまえると、子どもを褒める、受容するという関わりが、子どもの発達を促すことが予想される。一方、叱ることで、子どもが他者の思いやその場の状況についての理解を深めるということも考えられる。褒めるか叱るか曖昧な状況における親の養育態度が、子どもの発達にどのような影響を及ぼすかを検討することで、このような場面における望ましい親の関わり方がみえてくるだろう。

親の養育態度との関連性が検討されている心理特性の一つに、「レジリエンス」という概念がある(藤岡・村山, 2019; 葛西・藤井, 2013)。レジリエンスとは、「ストレスフルな状況でも精神的健康を維持する、あるいは回復に導く心理的特性(石毛・無藤, 2005)」である。大学生対象に調査を行った大石・岡本(2009)は、大学生のレジリエンスは、ネガティブな心理状態を立て直すために他者との感情共有を基盤とする「内面共有性」、物事をポジティブに考える「楽観性」、自分の判断や行動を見直す「内省性」、困難に対して自ら取り組もうとする「遂行性」の4因子から構成されることを示唆している。さらに、内省性、遂行性、楽観性の3因子については、現在・過去・未来を肯定的に捉えている者ほど、レジリエンス得点が高いことを明らかにしている。また、平野(2010)は、レジリエンスが獲得的レジリエンスと資質的レジリエンスから構成されることを示唆している。獲得的レジリエンスは、後天的に身につくレジリエンスであり、問題を積極的に解決することを目指す「問題解決力」、自分の考えや特性を理解し把握することを目指す「自己理解」、他者の心理を認知的に理解することを目指す「他者心理の理解」の3因子からなる。また、資質的レジリエンスは、遺伝的要素である気質と関わるレジリエンスであり、状況を肯定的に捉える「楽観性」、体調や感情などをコントロールする「統御力」、物事に対して目標や意欲をもち努力し達成を目指す「行動力」、他者と関わることを好む「社交性」の4因子からなる。

レジリエンスの構成要素は研究者間で違いはあるが、レジリエンスは過去の経験や学習により獲得することが可能であるという点は共通している。親の養育態度との関連では、母親の受容的態度や、子どもに興味・関心を向ける態度がレジリエンスを高めること（藤岡・村山, 2019）、母親の責める対応がレジリエンスを抑制することが示されている（葛西・藤井, 2013）。それでは、褒めるか叱るか曖昧な状況では、どのような対応がレジリエンスを高めるのだろうか。叱る行為が内省を促すと考えるのであれば、叱られた経験が多い者ほど、大石・岡本（2009）がいう内省性は高い可能性がある。一方、褒められた経験が多い者は、他者と感情を共有する心地よさを経験するという点で、内面共有性が高い可能性もある。褒めるか叱るか判断が難しい曖昧な状況での親の対応は、異なるレジリエンスの側面に影響する可能性が推測される。

また、乳幼児や子育てに対する考え方や態度も、親の養育態度の影響を受ける可能性がある。一般に、乳幼児や子育てに対する考え方や態度は、「保育観」や「親準備性」といった概念で捉えられる。保育観とは、保育における子どもとの関係性のあり方に関する認識であり（館林・宮沢, 2015）、過去の生育史や同僚との対話により作り上げられることが指摘されている（梶田・杉村・後藤・吉田・桐山, 1990; 松本, 2019）。親準備性も同様に、親としての役割を遂行するために必要な知識や技術、態度であり、過去の養護・被養護の体験によって養われることが指摘されている（e.g., 榎澤・福本・岩立, 2009; 礪波, 2011; 佐々木・山田, 2020）。褒めるか叱るか曖昧な状況での親の対応により、形成される保育観や親準備性も変わりうるだろう。

以上をふまえ、本研究では、子どもを褒めるか叱るか曖昧な状況における親の対応が、レジリエンスと保育観の発達にどのような影響を及ぼすのかを検討することを目的とする。これを検討するために、本研究では保育学科の大学生を対象に調査を行う。大学生を対象としたのは、養育認知を経由して、社会性や情緒の発達が促されることが示されているからである（e.g., 浅野ら, 2016）。また、保育科という特性をふまえ、乳幼児や子育てに対する見方や態度の指標として保育観を調査することとした。本研究では、大学生に子ども期の親の養育態度を思い出してもらおう。これにより、大学生の養育認知がレジリエンスと保育観の発達にどのように影響するのかを明らかにする。結果をふまえ、褒めるか叱るか曖昧な状況における、養育者の望ましい関わり方のあり方を考察することを目指す。

2. 方法

(1) 参加者

参加者は保育学科の女子大学生99名であった。回答に不備があった15名を除外し、分析は84名で行った。

(2) 質問紙

1) 褒められた・叱られた経験を測定する質問

日常生活で出会うであろう、褒められるか叱られるか曖昧な場面を、独自に4つ設定した（Table 1）。質問の冒頭では、「あなたの幼少期の親の養育態度についてお尋ねします。次のようなことがあった時、親からどの程度褒められましたか、叱られましたか。同じ体験をしたことがない場合、似たような体験や予想で回答してください。」と教示し、各場面について、

幼少期に親から褒められた程度、叱られた程度をそれぞれ5段階で回答してもらった(1:全く当てはまらない～5:非常に当てはまる)。

Tabel 1 褒められた・叱られた程度を測定する曖昧場面

あなたの幼少期の親の養育態度についてお尋ねします。次のようなことがあった時、親からどの程度褒められましたか、叱られましたか。	
同じ体験をしたことがない場合、似たような体験や予想で回答してください。	
1. かけっこの際に、ゴール直前で転んでしまった	褒められた (5段階で回答) 叱られた (5段階で回答)
2. 友達におもちゃを譲ったけど、片付けの時間だった	
3. お手伝いをしたくて、勝手にした	
4. 親の大切なものを壊したが、素直に話した	
注) 2～4についても同様に、褒められた・叱られた程度を5段階で回答してもらった。	

2) レジリエンス尺度

大石・岡本(2009)のレジリエンス尺度を用いた。この尺度は、内面共有性(6項目)、楽観性(4項目)、内省性(6項目)、遂行性(4項目)の4因子から構成される。それぞれについて、自分に当てはまるかどうかを4段階で回答してもらった(1:全く当てはまらない～4:よく当てはまる)。

3) 保育観尺度

館林・宮沢(2015)の保育観尺度を用いた。この尺度は、子どもの行動を管理し、指導中心の保育を目指す「管理的保育観」(3項目)、子どもの喜びを重視し、子どもの意志を最大限尊重する保育を目指す「子ども中心保育観」(3項目)、子どもの自主性を重視し、子どもの発達援助を重視する保育を目指す「協調的保育観」(3項目)の3因子から構成される。それぞれについて、自分の考えに当てはまるかどうかを5段階で回答してもらった(1:ほとんどそう思わない～5:非常にそう思う)。

(3) 手続き

大学の講義終了後、調査内容を説明し、調査への参加を求めた。参加者には、質問紙への回答により研究参加に同意したとみなすことを伝えた¹。回答時間は約10分であった。

3. 結果と考察

(1) レジリエンス尺度、保育観尺度の因子構造の検討

レジリエンス尺度の因子構造を検討するために、確認的因子分析を実施した。分析は、大石・岡本(2009)で見いだされた4因子を想定し、それぞれの因子から該当する項目が影響を受け、全ての因子間に共分散を仮定したモデルで分析を行った。その結果、モデルの適合度は $\chi^2 = 305.399$, $df = 164$, $p < .001$, $GFI = .766$, $AGFI = .700$, $RMSEA = .102$, $AIC = 397.399$ と、十分な適合が得られなかった。このことから、レジリエンス尺度が4因子構造ではない可能性が示唆された。

そこで、探索的因子分析を行い、本研究におけるレジリエンス尺度の因子構造を再検討する

こととした。最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った結果、5因子が見いだされた (Table 2)。ただし、複数の因子に高い負荷量を示す項目が存在すること (内面1、2、楽観1、2、3、遂行3、4)、いずれの因子にも十分な負荷量を示さない項目が存在すること (内面6) から、因子構造を再検討する必要がある。しかしながら、これらの質問項目を削除することにより、大幅なデータの損失が生じること、また、保育科女子学生という参加者の特殊性から、先行研究で明らかとなった因子構造が見いだせない可能性が考えられた。そこで、大石・岡本 (2009) で明らかとなった4因子を採用し、各因子に含まれる項目の内的整合性を示す α 係数を求めた。その結果、内面共有性 $\alpha = .85$ 、内省性 $\alpha = .82$ 、楽観性 $\alpha = .81$ 、遂行性 $\alpha = .80$ と、全てにおいて十分な値を示した。これをふまえ、以下の分析では、レジリエンス尺度を大石・岡本 (2009) と同じ4因子構造とみなし、全項目を分析で用いることとした。

Table 2 レジリエンス尺度の因子分析 (因子負荷量と因子間相関)

		F1	F2	F3	F4	F5	
内省2	なぜそうしたのか行動を見直すことがある	.938	-.285	.008	.054	-.017	
内省1	困ったことが起きるとその原因を考える	.731	.274	-.125	.025	-.157	
内省3	失敗したとき自分のどこが悪かったか考える	.708	-.064	.031	-.123	.054	
内省5	何かを考えるとさまざまな角度から考える	.705	-.073	.208	.107	.117	
内省4	自分の判断は適切か考えるほうだ	.493	.054	-.092	.091	.254	
内面6	人からの助言は役立つと思う	.290	.241	-.064	.194	-.093	
内面2	寂しいときや悲しいときは自分の気持ちを人に聞いてもらいたいと思う	.412	.660	-.511	-.108	.076	
内面1	つらいときや悩んでいるときは自分の気持ちを人に話したいと思う	.389	.633	-.476	-.077	.095	
内面3	自分の考えを人に聞いてもらいたいと思う	.349	.603	-.144	-.069	-.310	
楽観2	困ったことが起きてもよい方向にもっていく	.100	.596	.440	.539	-.042	
内面5	うれしくてたまらないときは自分の気持ちを人に話したいと思う	.330	.591	.084	-.025	-.270	
内面4	迷っているときは人の意見を聞きたいと思う	.332	.471	-.331	-.025	-.095	
楽観1	何事も良いほうに考える	-.029	.454	.297	.449	.173	
楽観3	困ったときふさぎ込まないで次の手を考える	.240	.432	.349	.403	-.050	
遂行3	決めたら必ず実行する	.282	.318	.646	-.495	-.122	
遂行1	失敗してもあきらめずにもう一度挑戦する	.261	.438	.492	-.268	.212	
遂行4	難しいことでも解決するために色々な方法を考える	.290	.349	.461	-.220	.253	
楽観4	困ったとき考えるだけ考えたらもう悩まない	.093	.272	.297	.354	.043	
遂行2	やり始めたことは最後までやる	.235	.281	.258	-.344	-.122	
内省6	困ったとき自分ができることをまずやる	.345	.097	.366	-.131	.540	
因子間相関		F1	—				
		F2	.382	—			
		F3	.316	.336	—		
		F4	.321	.162	.438	—	
		F5	-.127	.002	.011	.021	—

注) 項目の左側は、大石・岡本 (2009) の因子構造を示す。

保育観尺度についても同様に、因子構造を検討するために確認的因子分析を実施した。分析は、館林・宮沢 (2015) で見いだされた3因子を想定し、それぞれの因子から該当する項目が影響を受け、全ての因子間に共分散を仮定したモデルで分析を行った。その結果、モデルの適合度は $\chi^2 = 31.173$, $df = 24$, $p < .149$, $GFI = .933$, $AGFI = .874$, $RMSEA = .060$, $AIC = 73.173$ と、比較的よい適合が得られた (Table 3)。これをふまえ、保育観尺度については、館林・宮沢 (2015) と同じ3因子構造を採用し、全項目を分析で用いることとした。

Table 3 保育観尺度の確認的因子分析 (標準化推定値と因子間相関)

	F1	F2	F3
F1 管理的保育観 ($\alpha = .42$)			
子どもはほっておくと何をするかわからない	.411		
子どもは自分の気持ちをうまく表現できない	.438		
子どもはおとなが指示しないと何もできない	.553		
F2 子ども中心保育観 ($\alpha = .62$)			
子どもが楽しく過ごせることが良い保育・幼児教育だ		.514	
子どもが喜ぶことをおとなはずべきだ		.697	
保育者・幼稚園教諭は子どもが嫌がることをしてはいけない		.588	
F3 協調的保育観 ($\alpha = .71$)			
子どもの主張はよく聞くべきだ			.542
子どもとともに保育者・幼稚園教諭も楽しむ気持ち大切だ			.833
子どもの自主性は大切にされるべきだ			.702
因子間相関	F1 —		
	F2 .356	—	
	F3 -.396	.450	—

(2) 褒められ・叱られ経験によるレジリエンス得点および保育観得点の違い

褒められた・叱られた経験を測定する4つの場面の回答から、褒められた回答の合計点、叱られた回答の合計点を算出し、全体の平均値を求めた。結果、褒め得点の平均値は12.88点、叱られ得点の平均値は8.81点であった。この得点をもとに、褒め得点が13点よりも高かったものを褒められ高群、低かったものを褒められ低群、叱られ得点が9点よりも高かったものを叱られ高群、低かったものを叱られ低群とし、組み合わせにより (a) 褒高・叱高群、(b) 褒高・叱低群、(c) 褒低・叱高群、(d) 褒低・叱低群の4群を作成した。以下、この4群で、レジリエンス得点および保育観得点について一要因の分散分析を行う。各群の人数は、褒高・叱高群22人、褒高・叱低群26人、褒低・叱高群19人、褒低・叱低群17人であった。

1) レジリエンス得点

各群の合計得点の平均値、および下位尺度得点の平均値をTable 4に示す。合計得点及び各下位尺度得点について、分散分析を行ったところ、合計点、内面共有性、内省性で有意差が認められた(順に、 $F(3, 80) = 3.22, p < .05$; $F(3, 80) = 3.55, p < .05$; $F(3, 80) = 2.93, p < .05$)。Tukey法による多重比較を行ったところ、合計得点は褒高・叱低群 > 褒低・叱高群の有意差が、褒高・叱低群 > 褒低・叱低群の有意傾向が認められた。このことから、曖昧場面において褒め

Table 4 レジリエンス得点の平均値 (標準偏差)

	褒高・叱高群	褒高・叱低群	褒低・叱高群	褒低・叱低群
合計得点	61.18 (8.49)	65.69 (6.47)	59.42 (6.89)	60.18 (8.49)
内面共有性	19.32 (4.41)	21.54 (1.84)	19.05 (2.91)	18.82 (3.38)
内省性	19.00 (2.76)	20.81 (2.61)	19.11 (3.09)	18.35 (3.37)
楽観性	10.27 (3.07)	10.50 (2.42)	10.11 (2.40)	11.18 (2.90)
遂行性	12.59 (2.22)	12.85 (2.22)	11.16 (2.29)	11.82 (2.24)

られることが多く叱られることが少ない者は、褒められることが少なく叱られることが多い者や、褒められも叱られもしない者よりも、全体のレジリエンスが高いことが明らかとなった。また、内面共有性、および内省性は、褒高・叱低群>褒低・叱低群の有意差が認められた。曖昧場面において褒められることが多く叱られることが少ない者は、褒められも叱られもしない者よりも、他者と思いを共有する態度や、自己を振り返る態度が身につくといえる。

加えて、遂行性では有意傾向があり、褒高・叱低群>褒低・叱高群であった ($F(3, 80) = 2.47, p < .10$)。曖昧場面において、褒められることが多く叱られることが少ない者は、褒められることが少なく叱られることが多い者よりも、何事にも諦めない態度が身につく傾向にあるといえる。

2) 保育観得点

各群の下位尺度得点の平均値をTable 5に示す。各下位尺度得点について、分散分析を行ったところ、協調的保育観で有意差が認められた ($F(3, 80) = 2.90, p < .05$)。Tukey法による多重比較を行ったところ、褒高・叱低群>褒低・叱高群の有意差が認められた。曖昧場面において、褒められることが多く叱られることが少ない者は、褒められることが少なく叱られることが多い者よりも、子どもの自主性を重視する保育観が身につくといえる。管理的保育観、子ども中心保育観では、有意差は認められなかった。

Table 5 保育観得点の平均値 (標準偏差)

	褒高・叱高群	褒高・叱低群	褒低・叱高群	褒低・叱低群
管理的保育観	8.73 (1.86)	7.81 (1.92)	8.79 (1.51)	9.00 (1.70)
子ども中心保育観	11.64 (1.97)	11.42 (1.98)	11.47 (1.98)	12.00 (1.50)
協調的保育観	14.32 (0.99)	14.50 (0.76)	13.53 (1.78)	13.94 (1.03)

4. 全体考察

本研究では、子どもを褒めるか叱るか曖昧な状況における親の対応が、レジリエンスと保育観の発達に及ぼす影響を調査した。その結果、レジリエンスの合計得点は、褒高・叱低>褒低・叱高であった。このことから、先行研究と同様、曖昧な状況においても、褒められることが多いという肯定的な養育認知がレジリエンスを促進することが示唆された。また、叱られることが多いという認知が、レジリエンスを抑制するという点も先行研究と一致する。

レジリエンスの各下位尺度得点では、内面共有性と内省性が、褒高・叱低>褒低・叱低であった。また、遂行性は、褒高・叱低>褒低・叱高であった。下位尺度得点についても合計得点と同様に、褒められることが多いという肯定的な養育認知が、各レジリエンスの因子を促進していたといえる。ただし、楽観性のみ、群間差が有意ではなかった。平野 (2010) は、楽観性は気質による影響が強い資質のレジリエンスに含まれることを指摘している。生得的な要素が強いという理由から、楽観性では親の養育態度による違いが生じなかったのであろう。また、内面共有性と内省性は、褒められも叱られもしない場合に、発達が抑制されることが明らかとなった。褒められも叱られもしないという対応は、親が子どもの行動に興味・関心を示さない養育

態度であると考えられる。そのため、親と感情を共有する経験が乏しくなり、他者と感情を共有することの効果が理解されないのだろう。また、褒められも叱られもしないという対応は、親からのフィードバックが得られない状況でもある。そのため、子どもが自分自身の行動の意図や結果を振り返ることができず、内省する力が育たないのであろう。

保育観では、協調的保育観が、褒高・叱低>褒低・叱高であった。レジリエンスの結果と同様、褒められることが多く、叱られることが少ないという肯定的な養育認知が、乳幼児や子育てに対する適切な見方や態度を形成するといえる。これに対して、管理的保育観、子ども中心保育観は、養育態度による違いはなかった。これらの保育観は、親の養育態度とは異なる要因により影響を受けることが示唆される。

以上の結果から、褒めるか叱るか曖昧な状況では、親は子どもを褒めて叱らないという対応をとることが、子どもの情緒や社会性の発達を促進することが示唆された。曖昧な状況では、子どもの行動のポジティブな側面を見いだし、子どもに対応することが望ましいといえるだろう。

それでは、褒めるか叱るか曖昧な状況では、子どもの行動のネガティブな側面には触れなくてもよいのだろうか。本研究では養育認知を扱ったため、褒高・叱低群の学生が、ネガティブな側面を親から言及されたのか、されなかったのかはわからない。しかし、一般論で考えれば、褒高・叱低群の親も、子どもを褒めるだけでなく、ネガティブな側面にも言及していたと考えるのが妥当であろう。つまり、褒高・叱低の学生は、ネガティブな側面に対する親の対応を「叱り」であると認知していなかったことが予想される。これを考慮すると、曖昧な状況において子どもの行動のネガティブな側面に言及する際には、子どもが叱られたと感じない方法で言及することが重要であることが示唆される。子どもが叱られたと感じずにネガティブな側面に言及する対応とはどのようなものか、今後検討が必要であろう。

最後に、本研究の制約を述べる。第一に、本研究ではレジリエンスの因子が先行研究と異なる構造を示した。そのため、下位因子の結果は、慎重に議論する必要がある。ただし、レジリエンスの合計点については、先行研究と同様の結果が得られた。子どもを褒めて、叱らない（叱られたと認知されない）対応がレジリエンスを高めるといふ知見は、ある程度頑健なものだといえるだろう。

第二に、本研究の養育態度を尋ねる質問は、「親の養育態度」という尋ね方をしており、母親と父親を分けていない。藤岡・村山（2019）や葛西・藤井（2013）では、母親と父親を分けた検討を行っており、母親と父親でレジリエンスの発達に与える影響が異なることを指摘している。曖昧な状況における母親と父親の対応が、子どもにどのように認知されるのか、それらの養育認知が社会性や情緒の発達にいかなる影響を及ぼすのかを今後検討する必要がある。

本研究では、褒めるか叱るかが曖昧な状況での望ましい親の対応のあり方を検討することを目指し、レジリエンスおよび保育観という情緒・社会性の発達と親の対応との関連性を調査した。その結果、褒めて叱らない（叱られたと認知されない）対応が、子どもの情緒・社会性を促すことが明らかとなった。子育ての場面では、いかに対応すべきか曖昧な状況が数多く存在する。今後の研究では、どのような褒め方、叱り方が子どもの養育認知に影響し、子どもの情緒・社会性の発達につながるのかを、より具体的に検討することが求められる。

引用文献

- 兄井彰・須崎康臣・横山正幸 (2013) . 子どもの自尊感情と生活のあり方との関係についての研究 生活体験学習研究, 13, 43-50.
- 浅野良輔・吉澤寛之・吉田琢哉・原田知佳・玉井颯一・吉田俊和 (2016) . 養育者の養育態度が青年の養育認知を介して社会化に与える影響 心理学研究, 87, 284-293.
- 趙善英・松本芳之・木村裕 (2011) . 回想された親の養育行動が大学生の自尊感情に及ぼす影響の日韓比較：行動分析学的な解釈 社会心理学研究, 27, 1-12.
- 藤岡瑛・村山恭朗 (2019) . 大学生のレジリエンスと両親の養育態度の関連 神戸学院大学心理学研究, 2, 31-36.
- Galambos, N. L., Barker, E. T., & Almeida, D.M. (2003) . Parents do matter: Trajectories of change in externalizing and internalizing problems in early adolescence. *Child Development*, 74, 578-594.
- 平野真理 (2010) . レジリエンスの資質的要因・獲得的要因の分類の試み——二次元レジリエンス要因尺度(BRS)の作成—— パーソナリティ研究, 19, 94-106.
- 井上清子 (2015) . 両親・教師からの褒められ叱られ経験と自尊感情の関連について 生活科学研究, 37, 97-105.
- 井上清子 (2018) . 両親・教師からの褒められ叱られ経験と自尊感情の関連について II 生活科学研究, 40, 95-102.
- 石毛みどり・無藤隆 (2005) . 中学生における精神的健康とレジリエンスおよびソーシャル・サポートとの関連——受験期の学業場面に着目して—— 教育心理学研究, 53, 356-367.
- 梶田正巳・杉村伸一郎・後藤宗理・吉田直子・桐山雅子 (1990) . 保育観の形成過程に関する事例研究 名古屋大学教育学部紀要教育心理学科, 37, 141-162.
- 葛西真記子・藤井美沙子 (2013) . レジリエンスの形成過程——回想された両親像に注目して—— 鳴門教育大学研究紀要, 28, 295-306.
- Krevans, J., & Gibbs, J. C. (1996) . Parents' use of inductive discipline: Relations to children's empathy and prosocial behavior. *Child Development*, 67, 3263-3277.
- 榎澤令子・福本俊・岩立志津夫 (2009) . 大学生における過去の被養護・養護体験が現在の養護性 (nurturance) へ及ぼす影響 教育心理学研究, 57, 168-179.
- 松本佳代子 (2019) . 保育者の保育観に関する研究動向 共立女子大学家政学部紀要, 65, 143-154.
- 大石郁美・岡本祐子 (2009) . 青年期における時間的展望とレジリエンスとの関連 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, 8, 43-53.
- 佐々木真吾・山田真歩 (2020) . 保育科学生と他学部生の親準備性の比較——保護者理解と支援に向けて—— 名古屋女子大学紀要, 66, 265-274.
- 島義弘 (2014) . 親の養育態度の認知は社会適応にどのように反映されるのか：内的作業モデルの媒介効果 発達心理学研究, 25, 260-267.
- 舘林拓磨・宮沢秀次 (2015) . 保育士・幼稚園教諭の保育観と運動指導観 教育保育研究紀要, 1, 19-26.
- 礪波朋子 (2011) . 女子大学生の乳幼児との接触経験と育児イメージ及び養護性との関連 京都光華女子大学研究紀要, 49, 13-25.
- 吉澤寛之・吉田琢哉・原田知佳・浅野良輔・玉井颯一・吉田俊和 (2017) . 養育・しつけが反社会的行動に及ぼす弁別的影響——適応性を考慮した社会的情報処理による媒介過程—— 教育心理学研究, 65, 281-294.
- 1 調査実施にあたり、研究の趣旨、個人情報保護などについて十分に説明した。また、参加・不参加の決定により、不利益が生じることはないことを説明した。調査は無記名であり、研究内容についても個人への侵害が生じないよう倫理的に配慮し計画した。

